

## 第9回研究発表会要旨

12月11日 神戸大学発達科学部 G棟において 1時より行われました。今年度から高校生の発表も加わり、にぎやかで楽しい活発な会となりました。

出席

田村統 大賀二郎 阪口正樹 北村健 宇那木隆 山本一潔 大塚晴樹 石田良介 小国周平 稲葉浩介 中村有希 坂田ゆず 丹羽信彰 白岩卓巳 武田義明 栃本大介 花田暁子 内田圭 中村雅次 中村真美 坂田郁子 大日向郁夫 矢頭卓児 谷口博 後藤統一 菅沼定昌 奈島弘明  
以上27名

### 高校生発表

#### 1 「タンポポ調査から姫路市の環境を考える。」

副題—近畿タンポポ調査2005に参加して—

発表者 姫路高校 生物部2年生 大塚晴輝

石田良介 小国周平

「タンポポ調査・近畿2005」に協力することになり、データを同委員会に送るだけでなく、タンポポを指標植物にして、姫路市の環境について本格的に研究することにした。

タンポポ調査から姫路の環境を考えると、カンサイタンポポの比率から姫路市は都市化が進んだ地域だとわかった。特に、姫路市の中央部・臨海部は都市化が進んでいる、北部地域には今なお自然豊かな場所が残っていることがわかった。この19年間にカンサイタンポポが激減していることから、急激に都市化が進んだと考えられる。その変化は土地の開発が主な原因だと考えられる。また、狭義のセイヨウタンポポとアカミタンポポの分布の違いは、同じような環境に生育すると考えられる。また、シロバナ・雑種タンポポの分布は姫路市中心部に多く、とりわけ姫路城周辺に多く見られた。「なぜ、姫路城周辺に多いのか」新たな疑問がでてきたので、今後詳しい調査が必要だと思っている。

#### 2 「食餌がアフリカツメガエルの幼生の成長に及ぼす影響について」

神戸高校 自然科学研究部生物班2年生

坂田ゆず 中村有希

神戸高校自然科学研究部生物班では、アフリカツメガエルの食餌が幼生の成長や腸の長さの発達に及ぼす影響について調べました。

生殖腺刺激ホルモンの注射によって2ペアの雌雄から産卵、放精を誘導し、孵化した幼体626匹を得ました。鶏レバーを与えるものと、裏ごしグリーンピースを与えるもの、発達途中で草食性から肉食性の餌に切り替えるものに分け、異なる給餌条件で飼育しました。

各群につき5匹ずつ全長と体重を測定しました。また、解剖により腸の発達の様子を観察しました。実験結果から、幼体に与える餌の種類は、腸の成長に大きく影響することが分かりました。また、発達段階における採餌様式の切替えが、腸の弾力性や色など腸の発達に影響が出たことから、成長に関連があることが考えられます。今後、さらに深めて実験を進め、できれば顕微鏡による腸の観察なども行いたいです。

### 大学院生発表

#### 1 「六甲山地における・ブナイヌブナ個体群の現状とブナ林復元の可能性」

栃本大介

#### 2 「兵庫県南東部六甲山地における二次林の50年間の変化」

内田圭

### 会員発表

#### 1 「コウノトリ市民研究所の田んぼの学校について」

菅村定昌

コウノトリの試験放鳥が始まった。次に野生復帰させるのは子どもたちである。生き物調査を主体とした田んぼの学校は、運営も難しくなく子どもの野生復帰に最適である。泥を嫌って田んぼに入れなかった子どもがやがて夢中になって生き物を探し出す。同じ場所で繰り返しているので子どもたちの観察力は着実に高まっている。お昼には地元食材100の大鍋をしている。田んぼの学校は環境教育として高い可能性を持っている。

#### 2 「藍那の自然調査」

谷口博

本年度の観測調査は第2回目だが、前は調査地点を決定する下見のため、実際は今回が初回になる。以下に今回の調査結果の概要を示す。

(1) 調査日 2005年8月1日(月)

(2) 参加者 白岩、平畑、井上、阪口、谷口、矢頭夫妻の計7名。

(3) 調査地 藍那古道と小河地区の棚田

藍那小学校から蛇谷側に沿って、太陽と緑の道を丹生山へ向かう通称アイナ古道で実施。藍那小学校から100mほど行った所の左側の川縁にウワミズザクラがあり、たくさんの実をつけていた。右側の山裾には、ウバユリが開花を始めていた。河部落の棚田 小河部落の手前左側の山道を少し行くと墓地があり、これより200mあまり進むと手入れの行き届いた棚田に出る。小さな溜池が幾つかあり、土手はきれいに草刈りがな

されていた。キキョウ、カワラナデシコが刈り残されている。池には、ヒシ、イヌタヌキモ、シャジクモ、ヒルムシロ、サンカクイ、コガマ、ジュンサイ、ウキクサなどが見られた。

今回、目についたものについては採集し標本として、頌栄短期大学にて收藏する予定であるが、今後、打ち合わせを行って調査するポイントを絞っていかないといけないと感じた。

### 3 「宝塚の高司児童館の植生調査」

後藤統一

園庭除草の省力化に向けての基礎調査（中間報告）宝塚市高司児童館の環境整備も手がけている非営利組織メリーポピンズから、阪神支部に雑草制御の省力化はできないかという相談があった。

雑草を根絶すると昆虫もいなくなる。子供たちが草や虫と遊ぶことができ、園庭としての外観を、可能な限り省力化を計りながらも、維持するにはどのようにすればいいのか。このような観点から雑草制御のため基礎資料を収集中である。

### 4 「兵庫県菅生川産カワリヌマエビ属エビに付着する中国産ヒルミミズの実態と問題点」

丹羽信彰

①日本固有種『ミナミヌマエビ』が絶滅しようとしている。

2003年夏、菅生川産の本種の繁殖に関して卵を観察中、『変な虫』が体表に多数付着していることに気付いた。この『変な虫』は何か？中国産ヒルミミズ (*Holtodrilus truncatus*) と同定され、世界的権威メイン大学Gelder博士も巻き込んで大騒ぎになった。現在、年間20ト近く中国から輸入されている釣り餌用生きエビ（ブツエビ）に中国産ヒルミミズが付着して、非意図的に移入され、全く知らないうちに日本の河川に広がって、中国と日本のエビの交雑種が出来、日本固有種『ミナミヌマエビ』が絶滅しようとしている。まさにニッポンバラタナゴがタイリクバラタナゴに駆逐されたこの『エビ版』が進行している。

②インターネット販売も行なわれ、本来の分布域以外でも採集され、生物攪乱が進んでいることが窺える。

釣り餌用として販売される他「ミナミヌマエビ」の名でアクアリウムの観賞用動物や水槽の苔取り用としてインターネット販売も行われている。焼津および琵琶湖以西から鹿児島県にかけて分布記録があるが、分布記録のない千葉、神奈川県で採集され、京都市深泥が池や琵琶湖でも採集されるようになった。またハワイ、オアフ島真珠湾付近の淡水域でも採集され、密放流された可能性もある。

③中国からの釣り餌用生きエビ輸入に伴ってヒルミミズやエビヤドリツノムシなど付着生物があたかも『中国の一部を切り取るように』全くノーチェックで輸入され日本に広がっている。

④エビに付着するヒルミミズの生態については全く不明で産卵場所と産卵からふ化までについても触れた。

## 平成17年度生物学会西播支部活動報告

10月22日（土）的形町福泊海岸植生調査

生物部会西播磨支部・自然保護協会姫路支部共催  
高校生7名を含め、計16名が参加し実施されました。

9時半 杉田隆三先生の趣旨説明の後、山本一潔先生の実施方法の説明を聞き、4つのグループに分かれて砂浜の植生調査を行いました。

調査は午前中に終了し、海岸で弁当を食べた後解散しました。

10月30日（日）第5回里山観察会 上郡町赤松 「赤松の郷 昆虫文化館」

講師 昆虫文化館館長 相坂耕作 先生

横山正先生が指導する赤松原体験教室の児童18人を含め総勢38名が昆虫館に集い、相坂先生のバッタ類のお話を聞き、昆虫館の見学をしました。原体験教室の関係者以外は昼食の後、車に分乗し近くの神社・寺院を案内していただきました。

赤松 松雲寺のカヤ（樹齢800年）

苔縄 法雲寺のビヤクシン（樹齢800年 日本一）

岩木 大避神社のコヤスノキ群落

## 夏期研修会参加報告

奈島弘明

生物学会以外に兵庫植物同好会と合同で研修会があった。参加者は30名。

